山と博物館

第57巻 第12号 2012年12月25日 市立大町山岳博物館

1．博物館友の会によるカンジキ作り体験。材料の煮沸風景。2．前後の枠を重ね、爪部分を装着し固定する作業。
3．中央部分の肌色のものはジシャノキの表皮を剥いた状態で、その他の茶色のものは煮沸した後のもの。
4．両カンジキとも小谷の伝統的なカンジキ。（左側が、今回友の会の皆さんが作成したジシャノキ製爪カンジキ、右側がイタヤ製カンジキ）

写真提供：塩瀬淳也氏（大町山岳博物館友の会）

伝統に学ぶ　輪カンジキ作り

清水　隆寿

かつて北国の雪深き農家では、秋の稲刈りが済むと、冬を迎える準備を始める。ワラを撚り、縄をない、ワラジを編み、ワラナガグツ（シッペゾウ）の用意と怠りがなかった。しかし同じ冬の履物でも毎年定期的に何足も用意するものと、使用の都度手入れを施せば、十年あるいは何十年と新しいものを作らないものもある。後者の一つにカンジキがあった。同じ民具でも次世代への技術の継承には、難易の差があることがわかる。

大町山岳博物館友の会では11月に小谷村の山本国弥さんのもとを訪ね、輪カンジキ作りに挑戦した。かつては雪上歩行のため、冬の間の林業や狩猟、炭焼き、雪踏みなどのため、足が雪に埋もれないよう工夫された輪カンジキ。その淵源は、縄文時代に遡るとも推測されており、同時代では北欧や北アジアに類例が報告されているほど歴史が古い冬の生活用具である。文献史料には『山家集』（12世紀）や『太平記』（14世紀）に遡り、古くは「かじき」と呼ばれたことがわかる。国内の民俗例を見ると、雪質や地形、目的などにより形態や大きさ、使用材質に工夫が施され、地域によって様々なものが作られた。小谷地方だけでも、ジシャノキ（アブラチャン）やイタヤカエデなど幾つもの輪材を用いることが知られており、一本橇（そり）同様に新潟方面からの影響と推測される。かつては麻とワラを交ぜて作られたという踏み縄の部分も、山での遭難時にはカンジキを解いてロープとして使うことが出来るよう工夫が凝らされた。両足の踏み縄と靴の結び縄を結びつけると14mにもなるという。

これらはそれぞれの地域に連綿と伝わる智恵の一端であり、そうした自然の恵みを持続的に利用し、生きぬくための知恵の数々には、驚かされる。しかしこうした智恵や技術も社会の変貌とともに、いま失われようとしている。それは一度失われると再現は難しいものばかりである。だが一方で、山本さんら振興会の皆さんのように、故郷の生活の中から、きらりと光る郷土の文化を見つめ直し、足元に埋もれたあまたの郷土の原石を再発見し、郷土の個性に目を向けられた活動は、地域に勇気を与え、心を豊かにする。いままさに地域再生へのきらめきが胎動している瞬間を感じることができた体験であった。

（市立大町山岳博物館 学芸員）

厳冬期の黒部・立山

―遭難と踏破の足跡―

小林　茂喜

1　はじめに

佐々成政が、厳冬期のザラ峠・針ノ木峠を越えたという伝承は、この地方に根強くある。百瀬慎太郎もそれを信じた人の一人だと言ってよい。それが、大正12年の3月、伊藤孝一らと共に、ザラ峠・針ノ木峠越えを実行させた大きな要因であったろう。

この伊藤孝一・百瀬慎太郎らの立山越え(有明の赤沼千尋も同行)については、昭和55年に赤沼家の土蔵からその時のフィルムが発見され、平成16年、伊藤孝一没後50周年を記念して、山岳映像作家の羽田栄治氏らの手で編集され公開された。大町山岳博物館でも特集が組まれたし、筆者も「山と博物館」(52巻5号)で触れているので、詳細はそれに譲る。

伊藤や百瀬らがそれを成し遂げたことが快挙であることは言うまでもないし、「気象条件と行動の仕方によっては」、ザラ・針ノ木峠越えが厳冬期にも可能であることのひとつの傍証と言えなくもないが、そう簡単には言えないといってよいであろう。というのも、この地域では、いくつも遭難が起きており、命を失ったものも少なくない。(図1参照)

成政が家康の許へ向けて出発したと言われる天正12年11月の末は、新暦では12月末から1月初旬である(旧暦11月30日が新暦1月1日)。この時期の黒部立山は、人間が足を踏み入れることを拒んでいると言ってもよいだろう。表1に明らかなように、伊藤らはこのザラ・針ノ木峠越えに実に18日間を要している。従って彼らの快挙は、「よい気象条件を、何日でも待ち続け」「極めて慎重に判断して行動した」結果であり、そのように行動できる時間と、物資の備蓄と、拠点となる小屋の建設などによって、辛うじてもたらされた幸運であったといえるからである。

成政は、それらのどれも持ち合わせていなかった。目的も、安全、迅速、秘密裏に家康の許に行き、必ず帰ってくるということであった。その目的達成のために最も適した経路を選んで富山から家康の許へと至ったに違いないのである。

そこでこの地域で起こったいくつかの遭難と、また、この地域で狩猟や漁労を行った「山人」たちの行動に焦点をあてて、実際のこの地域の自然や地形はどのようになっているか、またどのような危険があるのか見てみたいと思う。

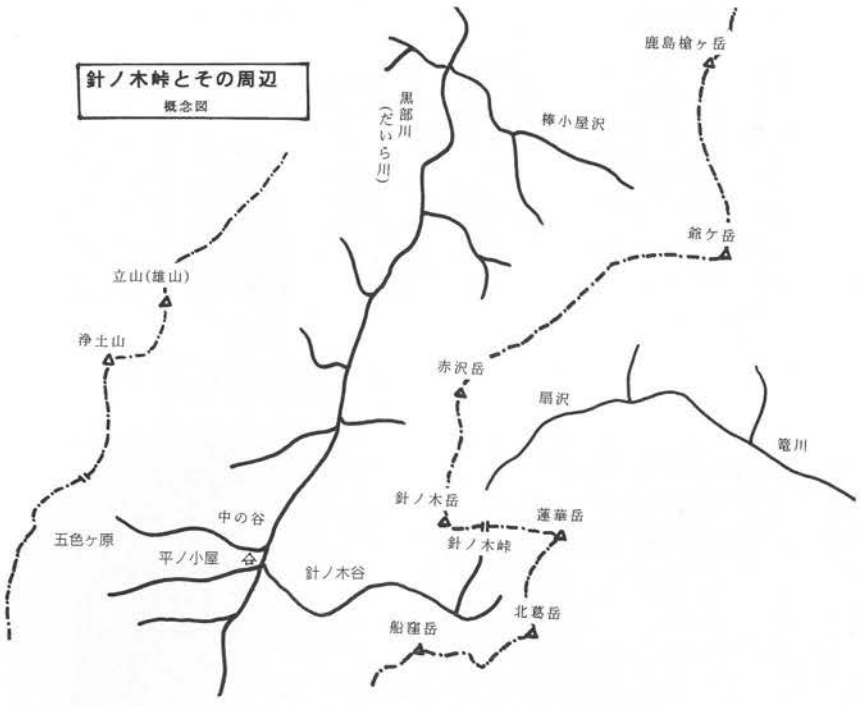

図1　針ノ木峠と周辺概念図

芦峅寺	3月　5日	発
藤橋	5日	着(泊)
(2泊)	6日	立山温泉へ発つも引き返す(泊)
	7日	立山温泉へ再出発
立山温泉	7日	立山温泉着(泊)
(8泊)	8・9両日	泊、10日　松尾峠往復して泊、11～14日連泊
	15日	室堂へ出発(室堂泊)、16日立山登頂(11時50分)
(1泊)	16日	立山から帰着して泊
	17日	平へ向けて出発
平	17日	平着、18～20日まで平泊
(4泊)	21日	大沢へ向けて発つ
針ノ木峠	21日	午後1時55分　峠着
大沢	21日	平より着(泊)
(1泊)	22日	大町へ発つ
大町着	22日	

表1　大正12年3月の伊藤らによるザラ峠針ノ木峠越えの登山行程

2　職業猟(漁)師たちの行動

厳冬期の黒部や立山で行動するということの実際はどのようなものであろうか。針ノ木峠を越えたり、積雪期の後立山から立山方面への山行を行った例をいくつか見てみよう。

最初の例は、曽根原文平である。彼は、黒部最後の職漁者といわれた人物で、戦後間もない時期から遠山冨士弥(黒部の主と言われた遠山品石衛門の三男)と共に、黒部でイワナ釣りを商売にした人物である。

昭和19年、満鉄の交通局事務官として敗戦を迎えた文平は、混乱の中で妻を亡くし、幼い二人の子を連れて命からがら信州へ帰り着いた。そして、ひょっとしたきっかけからイ

ワナをつるようになり、黒部へ出かけて遠山冨士弥の目にかない、冨士弥と「組んで」イワナ釣りを職業とするようになる。その詳細は、「イワナII 黒部最後の職漁者」（89年、白日社）に譲るとして、昭和24年の11月、漁を終えた二人は、燻製にしたイワナを背負い、御前谷（現在の黒部湖底）から、針ノ木谷を針ノ木峠に登って大町へ帰ろうとした。1日・2日とみぞれが降り、3日の晩には雪になった。冨士弥は来るときに持ってきた藁で二人分のシッペゾウ（草鞋につまかわのついたような雪靴の1種・写真1）を作り、それをつけて針ノ木谷を遡った。

筆者も夏の針ノ木谷を遡ったことがあるが、沢を遡り、船窪方面との「分かされ」から針ノ木峠を目指す道は、急な登坂路で、夏でも結構なアルバイトであった。積雪期なら雪崩の恐怖や危険にびくびくしながら登ることになるだろうと思ったものである。

11月の3日、膝から腰までの積雪の中を文平と冨士弥は峠を目指す。その時の様子を、少し長くなるが引用してみよう。

「そうしてそれ（シッペゾウ）をはいてあくる日の朝早く出て、いよいよ針ノ木沢の道にかかると、笹がね、ミゾレが凍

写真1　シッペゾウ

みついて道にかぶさって、歩きにくいんですよ。ところが小一時間登ると、もう高くなるから、その辺りから雪で、雪が笹を全部おさえちゃって歩きよかったです。

そうして道は針ノ木沢に沿ってずっと上がって、それから外れる（註＝正面の谷ではなく左手の谷に入ること。正面は蓮華岳と北葛岳の鞍部に出る）んです。そうしてから針ノ木峠へかかるんですが、そこには、その年の春の地こそぎのナダレ（底雪崩）で、何百年って樹齢のカラマツが押し出されてきて重なってね、その上に雪が積もってるから歩きようがないんです。それをなんとか抜けはしたが、こんどはその辺から雪が膝上まであるようになって、そうなると物言うのがシッペゾウでね、滑らんし温かだし、やあ、あれがなかったら大変でしたね。

そうして雪がいよいよ多くなって、腰丈くらいになったら、冨士弥さんが背中の荷を下ろしてね、『あんた、ここにいなさい　オレ　踏んでくるから』って言ってね、空身で行くんですよ。そうしてしばらくして戻って来て、さあ行こうと荷物を背負って行くんです。そうして踏んだ所まで楽に行って、こんだ私の番で、荷物背負ったまま同じ位の距離まで行って休んでいると冨士弥さんが来て、また荷を置いて踏んで行って戻って来ると。

そういう風に交替々々でやって、だんだん上に行くと雪は多くなるし、疲れてくるんです。それでね冨士弥さんのように空身でやってみたら楽なんですよね、つかれないんですよ。そうしてもう一つ、私は先に行くだけで戻ってないから1回しか踏んでないんだけど、荷物をとりに戻ってくれば、2度踏んであるわけで、その方がはるかに歩き易いんですよ。経験の違いを思い知らされましたね。

初めはね、冨士弥さんがいちいち荷を下ろして空身で行って、また荷をとりに戻るのをね、もう冨士弥さんも年だなあ、くらいに思っとったんです。そうじゃないんですよ。こっちが疲れてきてもあの人は疲れないんです。無駄なエネルギーは絶対使わないってことだったんですよね。

職業漁師のようなプロが積雪期の山に入る時の用心深さや自らに課していた鉄則のようなものがよく解る述懐であるが、同時に、膝まであるような積雪時の登攀の大変さと雪崩の怖さをよく物語っている述懐でもある。

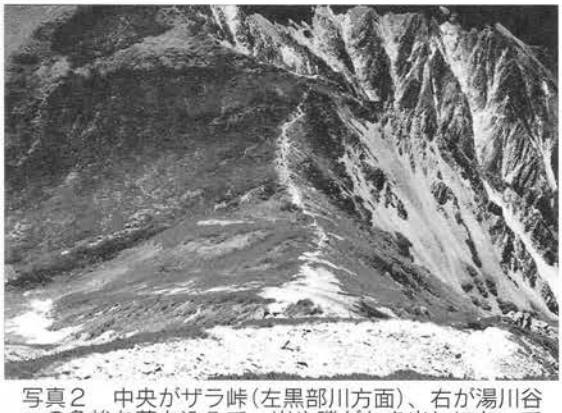

写真2　中央がザラ峠（左黒部川方面）、右が湯川谷への急峻な落ち込みで、岩や礫がむき出しになっており「雪崩の巣」と呼ばれることが納得できる。

後でも触れようと思うが、雪崩でもっとも規模が大きいのは春先に多い全層雪崩（底雪崩）である。これは雪解けの時期に急峻な沢筋がそっくり滑り落ちる雪崩で、現在トロリーバスの発着駅となっている扇沢の周辺から大沢の小屋にかけての辺りは周辺の沢筋が集まってくる関係上、ひんぱんに起きている。後で見る伊藤達夫の述懐に現れる「無残に鉄橋を吹き飛ばした」雪崩もそのうちのひとつであり、筆者も学生時代に飴のように曲がったその残骸を見た記憶がある。しかし全層雪崩は、起きやすい季節や時間帯にそこに居なければよいので、これに巻き込まれてしまったという話はあまり聞かない。積雪期の表層雪崩は、いつどこで起こるかわからない不気味さを持っている。雪崩による遭難というのは、ほとんどこれである。春先に全層雪崩の起きやすいところは、当然のことながら、積雪期の全期間を通じて表層雪崩も起きやすいところである。だからV字谷の多い山脈中では、冬道は尾根筋を中心に設定されている。さらさら越えに比定される「ザラ峠」付近は、樹木はもちろん草付きも少なく、地肌がむき出しになっているような場所（写真2）で、夏場に眺めても、冬場にここを通ることを想像するだけで怖いような場所である。おそらく表層雪崩は頻繁に起きており、成政がここを通ったと言い張る人にはぜひ一度積雪期に通ってみてほしいところである。

3　谷や沢はどう怖いか

今、筆者は不用意に「谷や沢は」と書いたが、谷と沢はどう違うのだろうか。越中側では「谷」ということが多く、信州側では「沢」と

いうことが多いという。川の流れに重点を置けば、「沢」であり、尾根に対して窪んでいる地形に重点を置けば「谷」となるのではなかろうか。あまり厳密に使い分けしないで話を進めたい。

次に伊藤達夫（当時「京都てつじん山の会」所属。京都府立大学助教授。平成21年新越乗越付近で遭難死）の経験を紹介しよう。伊藤は、大正12年の3月棒小屋沢で雪崩にあって亡くなった小林喜作の足跡をたどって、何度もこの地域に入った人物である。

伊藤は、まず夏場に2年がかりで2回（9月と7月）、ここを訪れた。そして喜作の遭難現場を確認し、その近くの尾根上にあったとされる遠山品右衛門の小屋跡もほぼ特定し、付近の地形や尾根筋沢筋の状況を踏査した。そして平成18年2月の下旬、新越尾根から棒小屋沢中尾根を伝って喜作の遭難地点近くに降り立つ。その部分をこれも長くなるが引用してみよう。

> 稜線には扇沢を詰めて行きたかったが、アルペンラインの鉄橋を吹き飛ばした雪崩の話を読んだことがあったし、自分自身も扇沢から鉄橋の下をくぐって籠川の河原にまで達するほどのデブリ（雪崩の雪が押し出し堆積した末端）を見たことがあるので、最も安全な新越尾根を登って途中で1泊…。（中略）
>
> そこは喜作の遭難現場から1kmほど下流であったが、両岸からのデブリをみているととても行ってみようという気にはならなかった。むしろ大急ぎで沢を下って牛首尾根の斜面に取りついた。（中略）
>
> 尾根自体は樹林に覆われどれも易しかったが、沢へ降りる部分と沢から尾根へ取り付くところはどこも急で、アイゼンとピッケルを駆使しなければならなかった。昔の猟師はもっと不完全な足ごしらえで荷物も重かっただろうから、どうやって通過していたのかと思う。よほど地形を熟知し合理的なルート選択をしていたのではないだろうか。また、効率的に移動できる沢筋を積極的に使っていることから、雪崩に対する判断も的確であったことがうかがえる。もちろん喜作を含め多くの猟師が犠牲になっているので、その判断能力は完ぺきなものではなかったのであるが。
>
> （「山と博物館」第53巻　第8号　平成20年8月）

表層雪崩のデブリを目の当たりにして、神経を張りつめている伊藤の様子がよく判る。そして、喜作など山に通暁したものが沢筋をうまく使って効率的に移動していること、雪崩に対する判断力の的確さに感嘆するとともに、それでも、喜作を含めて多くの猟師が犠牲になっていることから、「その判断能力は完璧なものではなかったが」と述べている。伊藤らは、喜作の二の舞にならないように、周到に準備し、用心深く冬山に入った。そのおかげか雪崩には合わなかったものの、平成21年の5月、思わぬ雨と雪に襲われて同行者と共に新越尾根付近で凍死している。春山でさえ、このように怖い。

厳冬期の山は、雪崩はもちろんのこと、一歩間違えば即ち死という様々な危険と隣あわせている。熟練者でもどのような苦難に陥るかわからない。では、成政らが通ったと伝えられるルートが具体的にどういう場所か、周辺で起こった遭難をとりあげて考えてみよう。

4　二つの遭難死

㈠　篭川谷（針ノ木雪渓）の雪崩遭難

残雪期に針ノ木雪渓に入ると、大沢の小屋からしばらく上った右手の岩肌に小さなレリーフが一つある。昭和4年6月に作られたもので、夏道からは見ることができないが、垂直に見える花崗岩の岩肌に梵字がほられてあり、その下に「遭難記念碑」「早稲田大学山岳部　1927・12・30没」と刻まれている。（写真3―1・2）

昭和2年12月30日、篭川谷赤石沢出合付近で雪崩が起こり、登高中の11名の早稲田大学生を呑みこみ、内4人が行方不明となって翌年6月遺体で発見された遭難である。

早稲田大学山岳部は、大沢小屋を中心とした冬期の放射状登山を課題として大正の末年から連年、この地域に入って活動していた。その様子を、山岳部の部報「リュックサック」第4号で、小笠原勇八は「更に厳冬、大澤小屋、平小屋、立山の小屋を連結して新しいルートと興味あるフランシールとを得らるゝ時も遠いことではないであろう」と述べて華々しい未来に胸躍らせている。しかし、小笠原らの希望は無残に打ち砕かれた。この地域が積雪期においてどれほどの危険性を持っているか、この時彼等はまだ知らなかったのである。遭難事故後、早大山岳部の野望は断念され、今日においてもそれを為そうとする者は誰ひとりいない。

リーダー近藤正以下11名の一行は、この日10時過ぎ大沢小屋を出発し、篭川本谷を電光形に登高して赤石沢との出会い付近に至った。スキーによる登高である。そして11時頃、先頭の渡辺がキックターンをした直後、突然表層雪崩が襲った。全員が流され、埋まった。11人の内上半身だけ埋もれた2人は自力で這い出し、次々と5名を救出したが、4名はどこに埋もれているかさえ定かではなかった。後で見ると、雪崩の規模は長さ4～5百メートル、幅7～80メートルに達していたという。結局埋もれた4人は見つからず捜索を断念、翌年6月融雪を待って再開、遺体が次々と発見されたのであった。

篭川谷は大きなV字谷で、積雪期には表層雪崩が、また融雪期には底雪崩がたびたびおこるという怖い場所である。ゴールデンウィークの連休から6月にかけての残雪期にこの谷に入ると、そこここに雪崩のデブリがあり、雪崩の怖さを容易に想像させる。

㈡　鳩峰の遭難

もう一つの遭難は昭和28年北葛岳鳩嶺付近で起こっている。

この年11月23日、同志社大学山岳部は、A・B二隊にわかれて北葛岳を目指した。北葛岳から派生する鳩峰が未開拓の地で、そこを制覇することが目的であった。二隊の内、A隊6人は籠川谷から針ノ木峠を経て北葛岳へ達し、笹平の東電第三発電所付近から鳩峰を登ってくるB隊を支援し、落ち合うという計画であった。

A隊は予定通りに北葛岳に達したが、B隊は急峻な地形に拒まれてこのルートからの登高を断念、蓮華岳から派生する尾根に取りつ

いて蓮華岳の頂上に立った。両隊は互いに連絡を取り合ったが、荒天の為か無線が通じず、A隊は、「北葛岳で合流できなかった場合は鳩峰から下山する」という事前の約束通り、ただし健康を崩した一人にもう一人を付き添わせて残し、11月29日、鳩峰から下山した。この下山も困難を極め、A隊の4人は二夜ビバークし、リーダーひとりが救援を求めて大町についたのは12月1日のことであった。その日の深夜、ビバークしていたA隊の3名は救出され、さらに大町観光協会、山案内人組合などによって組織された救援隊が北葛岳に残された2名を救出に向かったが、幕営地に2人の姿はなかった。健康を回復し、同じように鳩峰を下山したと推測されたが、まったく手掛かりはなく、17日を以て捜索は打ち切られた。この時のB隊のサブリーダー格平林克敏は、周知のように、後にエベレストへ登頂している。経験の浅い部員を含んでいたとはいえ、この時期の積雪の深さと急峻な地形、そして厳しい気象がこの遭難の大きな要因であったことは否定できない。（写真4）

佐々成政は針ノ木峠ではなく鳩峰を下ったと考える人もいる。笹平というのは、佐々成政の「佐々」からきているという伝承を真実と考えている人もいる（このような地名起源伝承のほとんどは、地名が先にあって、それに合わせる様に後から作られたものである）。しかしこの鳩峰付近における同志社大学の遭難は、そういう説が成り立たないことを示している。山岳関係者の中にも、成政が鳩峰を下ったと考える人が居るようであるが、長野県の山岳協会会長を務められた故武田武氏は、厳冬期のザラ・針ノ木峠越えが不可能に近いことを発言しておられる。また、筆者が平成16年にお目に懸った平ノ小屋のオーナー佐伯寛憲氏も、素人が厳冬期に両峠を越えることは不可能と言ってもよいと思うと言われた。

現代でももちろんそうであるが、ことに江戸時代にあっては、雪山に通暁した少数のベテラン猟師が、時期と天候を選び、雪の状況を確認し、慎重かつ大胆に行動して初めて可能になるのが、積雪期の入山であった。それでも時には遭難した。

成政の行動は、期日は迫られており、天候も雪の状況も選べる状況にはなかった。少数のベテラン猟師はなんとか確保することができたとしても、成政らの一行（20～30名）を含めれば部隊はすくなくとも50名ほどにはなろう。しかもその大半は冬山の経験は全くない人々である。そういう状況の中で山に入るということは、十中八九死ぬことを意味している。勿論成政は、勇猛果敢な人物であり戦国武将として常に死を覚悟して生きていたであろう。しかしその死は部将としての意味ある死であって無謀な頓死ではない。成政の目的は、第一に徳川家康、織田信雄に会うことであり、再起を約して富山へ帰ることであった。その目的に照らして考えれば、かれらが飛騨山脈越えという暴挙をあえて犯すことは考えられないのである。

写真３－２　雪崩遭難探索風景
（写真：百瀬堯氏蔵）

写真３－１　遭難記念碑石膏模型雛型
市立大町山岳博物館蔵（平成16年、稲門山岳会寄贈）

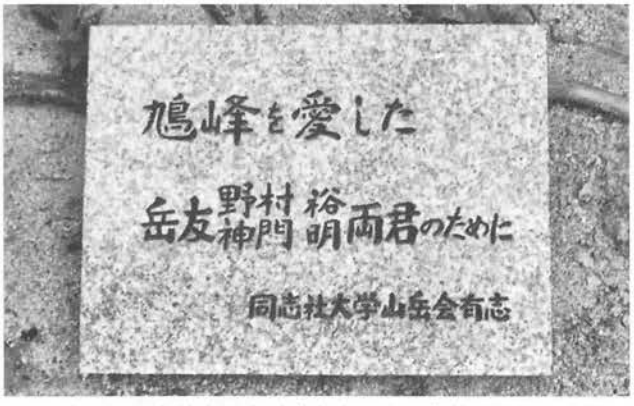

写真４　同志社大学山岳会有志による北葛岳鳩峰の遭難慰霊碑（写真：大町市文化財センター蔵）

5　伊藤孝一らの立山越えと佐々成政

冒頭に見た伊藤孝一らのザラ峠・針ノ木峠越えで、伊藤らが、篭川谷から針ノ木峠を目指そうとして、荒天のため大沢小屋に滞留していた大正12年2月26日午後2時、猛烈な雪の中を小屋に現れた人々があった。伊藤らが到着しないのを心配し、この日の早朝、平ノ小屋を出発した佐伯嘉左衛門ら芦峅寺の越中衆8名（表2）であった。

伊藤の備忘録によると、一行はこの日平ノ小屋を出発したという。午後2時と言う到着時刻が正確であるならば、いささか疑問に思う点がないでもない。というのは早朝出発したとしても、悪天候の中である。出発は早くとも午前6時頃であろう。すると彼らは8時

間足らずで大沢に着いたことになる（今日の夏道で順調に行ったとしてもそれくらいの時間は優にかかる）。この時、嘉左衛門らが語った天候と積雪の状況を伊藤は次のように記録している。

峠と大沢間の積雪軟質にして大腿部までを没し歩行非常に困難

大雪でかつ雪が柔らかったため針ノ木峠から大沢への下りは大変に苦労したというから、こういう状況の中で、8時間足らずと言うのはちょっと信じがたい所要時間である。というのも、3月21日、伊藤らが「全面結氷、歩行安易」という好天・好条件の中で同じコースを大沢小屋に着くのに要した時間が、伊藤の記録で見ると9時間ほどかかっているからである。とすれば、2月の悪天候積雪時にはもう少し時間がかかっていると考えるべきであろう。越中衆も含め、2月の時のメンバーが全員その中にいる。伊藤が時間や時刻を勘違いしたか、または嘉左衛門らの語ったことが伊藤の記録と違ったかどちらかであろう。なお、この時は、越中衆の「籠城（小屋での停滞）困難」という進言もあり、先にも記したように、翌27日大町へと下っている。3月の踏破成功の前段にこのような撤退があったのである。

伊藤らが立山越えをできたのだから、成政一行もできたはずだと簡単に言う人があるが、そうだろうか。

伊藤らが2月に信州から針ノ木・立山を越えようとして失敗したことは今見たとおりである。そのこと自体が、時期や条件によってはザラ・針ノ木峠越えが不可能に近いことの証拠である。

彼らが3月に富山側から再挑戦したことも

1．2・26に黒部平の小屋から大沢まで来た人々

佐伯嘉左衛門	佐伯福松
佐伯宗作	佐伯政吉
佐伯忠太郎	佐伯鶴松
志鷹喜一	志鷹光次郎

2．3・6に芦峅寺で合流した人々（上記の他）

佐伯栄作	佐伯亀蔵
佐伯清作	佐伯兵治
佐伯重吉	佐伯竹次郎
三川謙次郎	

表2　伊藤孝一らの立山越えを支えた越中衆

写真5　針ノ木峠に立つ伊藤ら一行
（写真：百瀬堯氏蔵）

すでに見た。このとき一行は、3月5日に藤橋を出発して22日に大町に着いているから、実に18日の日数を費やしている。途中雄山へ登るなどの寄り道をしたにせよ、それだけの時日を要したのは安全を第一に考えたからに他ならない。彼らは事を実行するにあたって「無制限の入山期日」をまず設けた。天候が悪くなれば何日でも滞留し、状況の回復を待とうとしたのである。また雪崩の危険をできるだけ避けるために「新雪の5寸程度なら出発、不幸にして尺に近き場合は滞在」というような原則をたて、絶えず天候や地形の状況を確かめながら、前進か停滞かを決定している。このためもあって立山温泉には9泊、平には4泊費やした。

伊藤らのこの慎重さと万全を期す姿勢は、生還を第一に考えれば当然のことであるが、幸運をも呼んだとも言えよう。と言うのは、ちょうど同じころ、二件の遭難事故が、しかも山のベテランであり誰よりも地形や気候、危険を熟知した人物らに依ってこの付近で起こされていたからである。

一つは、その後伊藤らも通った松尾峠で大正12年1月15日起こった遭難である。詳細は避けるが、大正10（1921）年にアイガー東山稜を初登攀した槇有恒が友人三田幸夫、板倉勝宣と3人で立山へスキー登山を試み、その下山中板倉が疲労凍死した事故である。

もうひとつは、大正12年3月5日、伊藤らが藤橋を出発したまさにその日、棒小屋沢で小林喜作が遭難している。雪崩であった。伊藤らは平ノ小屋に滞在中この遭難を知った。棒小屋沢は黒部川の支流で、平ノ小屋も同じ黒部川の谷筋にある。伊藤らも不気味に思ったに違いないが、伊藤らが針ノ木谷を遡上した3月21日は、「快晴」であり「雪面結氷、歩行安易にして前進捗る」（百瀬慎太郎宛て伊藤孝一書簡備忘日誌）状況であった。

年末年始が例年荒れることが多いのに対して、2月から3月のこの時期は、山の天候が比較的に安定する時期である。伊藤らの立山越えは、このような状況の中で成功したことを忘れてはならない。今日最新の装備を以って挑戦したとしても、雪崩の危険は避けようがない。天候が悪くなれば、伊藤らのように何日でも待つより仕方がないのである。（写真5）

一方、成政にはそんなゆとりは勿論なかった。一日でも早く家康と会い、一日でも早く帰って来なければならなかった。携行する食糧や装備も限られている。しかも実行すれば一か八かの暴挙であることには変わりない。

アイガーを登った実力者達や、極限の自然に鍛えられた猟師でさえ条件によっては餌食にしてしまう。厳冬期の黒部・立山はそういう場所である。そこを越えるという暴挙を、成政は選択しなかったと思えて仕方がない。

（大町市文化財センター・信濃史学会会員）

山と博物館　第57巻　第12号
二〇一二年十二月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二一一
FAX　〇二六一―二二―二二三二
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三一九三

この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。